

ブラック・ブレット もう一発の銃弾

八咫勾玉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ウイルス性寄生生物「ガストレア」と二度に渡って戦い敗戦した人類。人類は、ガストレアを退ける特殊な磁場を発生させる金属「バラニウム」で作られた巨大な壁「モノリス」で囲われた「エリア」の中で生活をしていた。

主人公の無久羅黎は、その中の東京エリアにすんでおりイニシエーターの雪宮桜香と共に暮らしていた。

そんな暮らしの中、黎と桜香はふとしたきっかけで天童民間警備会社の社員になり様々な事件に巻き込まれていく。

目次

プロローグ	1
キャラ設定	3
第1章 入社	
第一話	5
第二話	8
第三話	11
第四話	14
第五話	18
第六話	22
第七話	26
第八話	31
第九話	33

## プロローグ

「うくん…綺麗な夜空だなあ」

「そうですね…」

深い森の中の少し開けた場所で二人の男女が夜空を見上げながら話していた。

一人は、夜空に向かって大きく伸びをしている。

伸びをしていた男は、今年二十三歳になった。

もう一人はその男の側で立って同じように夜空を見上げていた。身長は、男の臍より少し大きい。髪の毛の色は、黒く伸ばしそれを後ろで一つに束ねている。

「さあ…そろそろ探索をやめて東京エリアに戻るか」

「そうですね…いい時間だと思います」

「じゃあ戻るか…桜香」

男は、自分の側で夜空を見上げていたイニシエーターの少女雪宮

桜香《ゆきみや おうか》に声をかける。するとすぐに返事がかえってきた。

「はい…あなたの指示にしたがいます。黎」

桜香から、黎と呼ばれた青年の名は、無久羅 黎《むくろ れい》。彼らは『民警』と呼ばれる組織属している。民警は、対ガストレアのスペシャリストでありガストレアを駆除することを生業としている。

黎と桜花は、今未踏差領域に来ていた。目的は、特になくただ気まぐれに探索だといって歩き回りガストレアに遭遇した先から殺して回っていた。そんなこんなで未踏差領域を動き回って疲れたため何処かで休憩しようと思つてたら少し開けた場所がありそこでぼーと座っていた。それが、今に至るまでの経緯いだ。

黎は、隣にいる桜花に手を伸ばしその手を桜花が握り返し、そのまま手を繋いで東京エリアに足を向けた。

—————

未踏差領域の探索というあの散歩をした次の日、黎と桜花が町中を歩いていると近くで銃声が聞こえてきた。何処かで、ガストレアと交

戦してるのかと思いいその近くまで行ってみようと走り出した。

しばらく走ると、もう戦いが終わっており走り去っていく少年とその後ろをじゃれつく子犬のようについていく幼い少女と、それを見送る私服警官の姿があった。

「チツ…………ちよつと遅かったか…………」

「そうみたいですネ…」

「戦ってるって見たかったなあ」

「そうですね…………それより黎、買い物にいきましょう」

黎は、悔しそうに爪を噛んでいたが桜花が話しかけてきたので気を取り直して返事をした。

「ん…………そうだな…………今日の晩飯はなんだ？」

「うーん…………何にしましよ…………」

「まだ決めてないのか？」

「はい…………スーパーに行ってから献立考えようかなあ…………」

「お前が作ってくれる飯はウマイから何でもいいぞ…………とりあえずスーパー行こうぜ」

「そうですね…………では行きましょうか」

「おう!!」

黎と桜花は、スーパーに足を向けて歩き始めた。

このときは、まだ自分達が天童民間警備会社の社員になるとは面湯にも思っていなかったのである。

## キャラ設定

主人公

プロモーター

名前：無久羅 黎（むくろ れい）

性別：男

年齢：23歳

身長：175cm

体重：65kg

装備

日本刀×2本：刀身がバラニウム

デザートイーグル・50AEX2丁：銃弾がバラニウム

設定

本作の主人公であり、天童民間警備会社の社員。本作中に入社し、蓮太郎や木更と働く。天童民間警備会社の中で一番IP序列が高く、既にtop50におり二つ名は、双剣双銃《カドラ》と呼ばれているが黎だけでも二つ名があり狂人《バーサーカー》とも呼ばれている。

イニシエータの桜花とは、仲がよく共に行動することが多いがロリコンではない。普段は、木更の補佐役として事務的なことをしているが一度戦闘に火がつくと性格が変わり手がつけれなくなる。止められるのは、桜花だけである。

木更が、好意をよせているが本人は気付いておらず木更はどうすれば振り向いて貰えるか日々考えている。

イニシエータ

名前：雪宮 桜香（ゆきみや おうか）

性別：女

年齢：10歳

身長：147cm

体重：48kg

ガストレア因子：モデル；ウルフ

装備

虎の爪（バグ・ナウ）×2：バラニウム

ベレッタM92×2：銃弾がバラニウム

設定

ガストレアウイルスを体内に宿す「呪われた子供たち」の一人であり黎のイニシエータ。天童民間警備会社の社員であり、黎とのIP序列はtop50にあり二つ名は、双剣双銃《カドラ》と呼ばれている。黎の暴走時のストッパーであり、ゾーンに到達した者でもある。性格は、温厚で大人しく礼儀正しい。延珠とは、犬猿の仲でありなにかと張り合っている。木更が黎に、好意を寄よせていることは知っているためよく相談に載っている。

料理が得意なため自宅では炊事担当であり、黎が「ウマイ!!」といってもらえることに喜びを感じており木更がよく料理を教えてもらうためにかよっている。

力解放時の能力は、俊敏性の向上と夜間の探索、嗅覚が敏感になる。そのため、昼夜とはず搜索に向いているため依頼達成率はほぼ100%であり、今のところ一度も獲物を逃がしていない。

その他登場人物

里見蓮太郎（木更が黎に好意をよせていることを知っている）

藍原延珠

ティナ・スプラウト その他登場人物はほぼ原作通り

天童 木更

ほぼ原作通りだが、黎に好意をよせておりアピールするが全然気付いてもらえないため黎のイニシエータである桜花によく相談している。桜香は、黎と木更が恋人になって欲しいと思っているため色々手伝っている。

出会って間もない頃は、頼りがいのある大人だと思っていたが戦闘時の姿に一目惚れし尚且つ平常時のさりげない気遣いや回りへの気配りなど大人の余裕に心惹かれいつの間にか好きになっていた。

# 第1章 入社

## 第一話

スーパーへついた黎と桜香は、買い物カゴを持ってスーパーの野菜コーナーから回り始めた。二人で仲良く店内を回っていると先程の民警ペアがいた。そのカゴの中には、タイムセールのもやしが入っていた。

「ん?…桜香ちよつとあれ見ろよ」

「はい?なんですか?」

黎に声をかけられた桜香は黎が指差す方へ顔を向けた。そこには、先程の民警ペアがいた。

「あの人たちは確かさっきの……」

「ああ…間違いない…なあ桜香……」

「ハア…:…わかりました早く買い物済ませましょうか……」

「スマンな……で、晩飯は何にするか決めたのか?」

「はい…親子丼とサラダにしようかと」

「親子丼かぁいいね!!」

「じゃあ晩飯が決まったしさっさと買っちゃおうぜ!!楽しみだなあ」

「ふふふ……なんか子供見たいですね」

「!?今のは聞き捨てならないなあ」

「ハイハイ……早く買い物しないと見失ってしまいますよ」

桜香は、そういつて黎をおいてカゴの中に自宅の冷蔵庫の中の物と足りない物を照らし合わせ必要な食材をカゴの中にいれて、レジへと向かう。黎は、少し物思いに更けていたがすぐに正気に戻り桜香のあとを追った。

黎と桜香は、先程見かけた民警のあとをバレないように追跡した。すると、とある雑居ビルの中にはいつていった。その雑居ビルのテナントの三階には天童民間警備会社であった。黎と桜香は、その雑居ビル「ハッピービルディング」に入ってしまった。そして、階段を上がる。三階まで上がると、ある部屋から声が聞こえてきた。



「この、お馬鹿ッ！」

その声と同時に、中からなにか争うような物音が聞こえた。もう少し様子をみようとするドアの前まで移動して中のやり取りを聞き始めた。「なんでかわすのよ腹立たしいわねッ」

「無茶苦茶言うなよ！」

中からはガタガタと逃げ回るような音がした。

「逃げ足……ばっかり、早いん、だから……」

少女が息をあげながらしゃべっていた。

「なあ、また新しい仕事を受けてた時に頑張ろうぜ、木更さん」

「馬鹿なこと言わないで！これが最後のチャンスだったのよ！」

「それと、仕事してるときは木更さんじゃなくて社長って呼びなさい」そんな話が聞こえたあと、すたすと足音がしたあとギシツと音がした。

「つまりこういうこと？君はその机の上に乗っているタイムセールの商品を買うために急いだら、途中で警察から報酬を貰い損ねたことに気づいた、と」

「……ああ」

「それでも君はモヤシだけは二袋買ってきた？」

「そ、そうだ！……お一人様一つ限りだったので延珠も連れて二つ買ったさ！」

「……………アンタも食べるか？」

ペチンとモヤシの袋を投げた音がした。

「ちよつと里見くん、今月は収入ゼロよ。誰のせいだと思ってるのこの甲斐性無し、最弱、お馬鹿。それと君の中では社長への仕事の報告よりもスーパールのタイムセールの方が優先されるの？」

「ーなにより、どうして私にタイムセールのこと教えてくれなかったのよッ！」

木更と呼ばれた少女は、続けざまに里見と呼ばれた少年を罵倒し、ギシツと音をたて椅子に座たようだった。

ここで、黎と桜花は事務所のドアを叩いた。

「コンコン……失礼します」

「失礼します」

黎と桜香は、そういつて事務所に入った。事務所の中には、男女二人がおり以下にも繁盛してなさそうであった。

「へ〜…結構いい感じじゃん繁盛してなさそうだけど…」

「黎…開口一番にそれは失礼ではないですか？」

木更と蓮太郎は、突然入ってきた黎たちに驚きを隠せないでいた。しかし、二人は自分達のペースを崩さずに辺りを見回していた。

「なあ…桜香…なんか目の前の二人なんも反応しないんだけどどうしたのかな？」

「イヤイヤ…黎…いきなり知らない人が入ってきて部屋中見回してたら誰だつて驚きますよ…」

「ん？そんなもんか？」

「まずは、自己紹介でもしましょうか…え〜とまずは私から名乗りますね

序列五十位、モデル・ウルフ雪宮桜香と申します

以後お見知りおきを」

「同じく序列五十位、無久羅黎だ。よろしくな」

「ツ!!序列五十位!!」

「ま、マジかよ……」

黎たちが名乗ると、木更と蓮太郎は啞然としたように驚いていた。

「なあ…お二人さん…俺たちを雇う気はないか？」

「ツ!!!」

木更と蓮太郎は、今しがた黎が発した言葉に驚愕していた。

## 第二話

木更と蓮太郎は、今しがた黎が発した言葉に驚愕していた。それもそのはずだ。

この天童民間警備会社は、出来ただかりで知名度も低いため高位序列の黎たちに払えるような大金は、ないからだ。例え、払えたとしてもすぐに倒産してしまうだろう。

それなのに、いま黎が発した言葉はこの会社を倒産させるようなことを言ったのだ。木更と蓮太郎は、困ったような目で黎たちをみていた。

それに気づいた黎は、こう付け加えた。

「あ……俺は、お前に興味があつてここまで気づかれないようにつけてきたんだからな……里見くん」

「え……お、オレ!？」

黎は、蓮太郎に指を差し、蓮太郎はなぜ自分が指差されたのか理解できないでいた。するとその様子を見て黎が話を切り出した。

「その反応は、理解できてないな」

「そりやそうだ……俺は、あんたと話したり、すれ違ったりしたことがないからな。あんたはどこで俺をみかけたんだ？」

「ん？そりやあ、さっきお前さんがそこのお嬢さんに報酬を貰い損ねて怒鳴られてた仕事の時だ。正確には、お前とイニシエーターが走り去って行く時だったかな。なあ桜香？」

「ふあ……えくとそうですね。」

「桜香なんか眠そうだな」

「うくん……黎眠いです……」

「そうか……スマンがソファア貸してもらっていいか？」

「ええ……いいですよ」

「スマンな……」

黎は、木更に断りをいれ桜香をソファアへと誘導し寝かした。

「すうすう……zzzz」

桜香が、寝付き始めた頃黎は改めて木更と蓮太郎に向かって口を開

いた。

「寝たか……さて返事を聞かせて貰おうか」

「えーと……少し考えさせて貰ってもいいかしら……」

木更が、そういう考え出した。しかし、木更はすぐに考えることをやめ口を開く。

「……貴方を雇わせていただくわ……黎さん。でも本当に良いの？貴方ほどの実力者ならもっと良いところに入ることも……」

「出来ただろうな……だが俺は自分で決めたところしか入らないと決めてたからなくその点お前らは運が良かったってこった」

黎がそう言うと、木更は納得しました口を開いた。

「そうですか……これからよろしくお願いします。で……話が変わりますが桜香ちゃんの寝顔カワイイですね……（／／／ω／／／）♪」

「だろ？この寝顔を見ると癒されるんだよなあ〜」

黎は、寝ている桜香の頭を優しく撫でながら見ていた。その顔にはどこか慈愛に満ちた表情に見えた。

黎と桜香はどれ程の苦難と苦痛に耐えて今の序列に上がったのかわからない……がしかし、二人には他の誰も入ることができない強い絆を感じられた。

「さあこの話はここまでにして里見くんお茶いれて」

「自分でやれ」

「あら、今日報酬を貰い損ねたのはどこのお馬鹿だったかしら？」

「ここでそれをぶり返すかよ……木更さん……」

「私は、事実を言ったままでよ？」

「チツ、はいはい、ただいまお持ちしますよ、お嬢様」

「あ……じゃあ俺にも頼めるか？てかお前ら仲が良いなあ〜」

「え……そうみえるの／か!!」

「ほら、今も息ピツタリ」

「……それはさておき、お茶淹れてくるよ」

蓮太郎は、苦虫を噛み潰した様な顔をしながら応接室を出て給湯室にいき急須に湯を注ぎ黎と木更の前の机の上に置いた。

「ん、ご苦労」

「ありがとうございます」

木更は、お茶を手に黒檀の執務机に移動し、肘掛け椅子に座るとノートパソコンを開きキーを叩き出した。黎は、お茶呑みながらまつたりしていた。…しばらくして木更が、キーボードを叩くのをやめふと顔を上げる。

「ねえ、里見くんが倒したガストレアって感染者だったのよね？」

「そうだよ」ぶっきらぼうに言って、彼女の言わんとすることを察して続ける。「感染源の方は見つけられなかったけど、おそらく同じモデルスパイダーの単因子だ。鳥型とか羽虫型とかじゃないから、もうとつくに他社が見つけて始末してるだろ。ステージIII以上の敵だとしたら、こつちに応援がかかるはずだし、その証拠にバイオハザード警報も発令されてない」

蓮太郎が倒したような単因子のガストレアは地球上の生物をスケールアップしただけだ。二重因子以降は、特に四つ以上のDNAが混ざったガストレアの姿は怪物としか言えない。

通常ステージI〜IVの間で表されるガストレアの成長度合いだが、数値が上がるごとに加速度的に強くなるので、お世辞にも仲がよいとは言えない民警同士も、さすがに自分の手に余ると感じた場合、連携して殲滅をする。

そのお呼びが掛からないということは、あつさり駆除できたということではないか。

木更はパソコンのディスプレイに視線を落としながら蓮太郎の意見を一蹴した。

「そんな情報はないし、それどころか目撃情報も上がってないわよ」

「えッ？」

「それは本当か？」

黎も話に入ってきた。

木更はノートパソコンを百八十度回転させる。そこに写っていたのは地図だった。ガストレアとの交戦があった場所、目撃情報が出た場所が最大九十日間にわたって遡ることができる民間機関のウェブサイトだった。

### 第三話

「これは……」

蓮太郎と黎は眉をしかめて木更の方を見ると、彼女は頷いた。

「ないわよね？」

「ああ……でも感染源の目撃報告が一つもないなんてことあり得ねえだろ」

「ここにあるじゃない」

「確かに……」

木更は髪をかき上げ挑発的な上目遣いで蓮太郎を見る。

蓮太郎は目を細め、もう一度ウェブサイトの地図と文字を追っていく。

黎はお茶を呑みながら、思考を巡らす。

「どうして政府は周囲一帯に警告を出さない？これは一大事だツ!!」

「里見くん、政府は無能じゃないけど、避難警報とかの強制手段とかはほとんど取らないから、期待しても無駄よ。まあ、だからこそ民警の仕事があるんだけど」

「まあそうだな……」

蓮太郎は、二人からそういわれ内心毒づきながら緩く頭を振った。

「専門家の意見が必要だ。これから『先生』に話を聞いてくる」

「?……先生」

「ああ……黎さんは知らなかったわね」

「先生つてのは、室戸董つて人で……」

「ああ……ガストレアの研究者にして日本最高の頭脳でありマッドサイエンティストだっけか？」

「よく知ってるな……」

「まあ……それはさておき私も同業者にそれとなく探りをいれてみるわ。里見くん黎さん、残りの感染源も私たちが狩りましょう、可及的速やかに」

「わかった」

「了解、社長……それじゃ早速俺も独自で調べるかな……何か分かったら

連絡する…そうだ二人の連絡先教えといてくれないか？

いちいち集まったりするのメンドイから」

「わかったわ」

「了解」

黎は木更と蓮太郎と連絡先を交換して桜花の寝てるソファーにいき桜香を優しく揺すり起こす。

「桜香そろそろ帰るぞ」

「……ううう……ふわあ……」

桜香は小さなあくびを一つして目を擦りながらいそいそと上体を起こした。

「黎さんおはようございます」

「おはよう、桜香」

木更は今の桜花の様子を見てうずうずとしている。

「？……木更さんどうかしたか？」

それに気づいた蓮太郎は木更に問いかけた。

「……桜香ちゃん…かわいい…抱きつきたい……」

木更がそう呟き少し後ずさる蓮太郎、そんなこととは露知らず黎と桜花は帰り支度をしていた。

「里見くん、そういえば延珠ちゃんは？」

「え、ああ、眠たくなってきたって言ってたから家に帰したよ。アンタも帰るなら途中まで送んぞ」

「ごめんなさい、今日は血液透析の日だから病院に行かないと」

「ああ、そういやそうか」

木更は冷めかけた茶に一口、口をつけると、事務所の中を見渡した。蓮太郎もそれを目で追う。

応接スペースと、蓮太郎と延珠の机…これに明日黎たちの机が追加されるだろう…。

暖簾をくぐると炊事もできるよう小さなキッチンがついている。

木更たちはこの事務所が不思議と嫌いではない。

「もう一年になるのね、君がプロモーターになり、延珠ちゃんと出会ってから」

「『まだ』一年目だ。俺もアンタもまだ目的の半ばに過ぎない」

「そうか……お前らはまだ一年なのか……俺は六年目くらいか」

黎のこの言葉に木更たちは驚愕する。目の前の青年はわずか六年で今の序列へと上り詰めたのだ

自分たちは飛んでもない人物を迎え入れたとおもった。

「それじゃまたな……行くぞ桜香」

「ハイ……黎」

そういつて二人は事務所を後にした。



## 第四話

事務所を後にした黎たちは自宅への帰路についていた。そんな中桜香は疑問に思っていたことを黎に尋ねた。

「あの…黎…聴きたいことがあるのですが…いいですか？」

「桜香が聞きたいのは入社の子だろ？」

「はい…また前のようにならないか心配で……」

「……………」

黎は桜香の懸念に答えられなかった……。

かつて黎と桜香はある民警会社に所属していた。があることによりその会社は潰れ所属していた民警ペアや役員たちはある一組のペア以外が全員死亡という大惨事があった。その一組のペアと言うのが黎と桜香である。

その事件の詳細はすべて闇の中だ。その事件の詳細はまた今度にしよう……

黎は一瞬あの出来事がフラッシュバックしたが頭を小さく降りその記憶を振り払う。そして桜香の方に顔を向け小さく微笑みながら頭に手を置き口を開く。

「確かにまたアノ事件の様にならないとは限らない……でも…何時までも立ち止まってはられないからな……」

「……………そうですね…何時までも立ち止まってはなにもできませんよね…ただこれだけは約束してください…もう無理はしないことそして溜め込まないこと」

「……………わかった」

黎は桜香の言葉を素直に受け入れた。

いつの間にか立ち止まっていた黎たちは再び歩み始める。そのあとの二人は他愛のない話や装備の話などをしながら自宅へと帰っていった。

その頃、蓮太郎と木更は……

「黎さんたち帰っちゃったね」

「そうだな……」

「里見くん、延珠ちゃんと会ってから変わったわね」

「唐突にどうしたんだよ？」

「いえね……ちよつと振り返ってみてそう思ったのよ……よく笑うようになったし、料理もするようになった。昔の里見くんからは、ちよつと考えられない」

蓮太郎は恥ずかしそうに顔を逸らす。

「そんなことねえよ」

「里見くん、君のいまの目的ってなんなの？」

「え？」

「延珠ちゃんのお親を探すこと？ 里見くん、子供の頃よく『お父さんとお母さんは必ず生きてるから探し出すんだ』って言ってたわよね？ でも最近は聞かなくなった……いまでもそう思ってるの？」

木更は別段怒るでもなく、こちらを見据えていた。だが蓮太郎はそれに堪えきれなくなつて頭を降つた。

「かんけーねーだろ」

なるべく平静を装つて言つたつもりだったが、吐き捨てるような険悪な響きを残した。

「……もういいんだ、俺のお親が死亡したのは、間違いねえんだからな」

チクシヨウやつちまつたと思ひ、蓮太郎は頭を抱えながら夜道をとぼとぼと歩いていた。

その足で蓮太郎が向かったのは勾田公立大学付属病院だった。

受付はすでに顔パスであり正面玄関から北側に向かつて進み室戸董の部屋へと歩を進めた。

部屋につき室戸董からの意見と洗礼を受け、蓮太郎は自宅へと帰っていった。

自宅へと帰つた後も蓮太郎の精神が休まることはなかつたのは全くの余談である。

翌日の昼頃、黎たちが昼食をとっていると携帯が震え出した。画面をみると天童木更の名が写し出される。何かと思い通話を押す。

「どうかしましたか社長？」

「昨日のことで防衛省までついてきてほしいの」

「なんで防衛省何だ？」

「分からないわ、とにかく来い、としか言われてないの…里見くんにも連絡したけど貴方にも来てほしいの」

「…少しキナ臭いが了解、桜香も連れて車で向かう」

「え…車あるの？」

「ああ…何なら迎え行こうか？」

「お願いします…私は今勾田高校で里見くんを確保した所だから勾田高校まで来てくれるかしら？」

「了解…十分で向かう」

そう言つて電話を切り桜香に向き直ると、今の会話を聞いていたのかそそくさと食べ終え準備をしていた。黎も残っていた昼食を急いで掻き込み、シンクに持っていき水につけて準備を整え車の鍵を持ち自宅を出た。

自宅を出た黎たちは勾田高校に車を走らせ木更たちを見つけると何やら言い争っていたがついたことに気がつく。此方に近づいてきた。黎は車から降り二人に声をかけた。

「悪い…待たせたか？」

「いえ、待つてないですよ。それよりは黎さん…その車は？」

「ああ…俺の愛車の一つで『レクサスLX570』だよ。この他にランボルギーニや自衛隊の使つてる軽装甲車なんかもあるな」

「……………」

木更と蓮太郎は今の黎の発言に驚愕し、固まってしまった。それもそのはず今やランボルギーニなどの高級車は見る影がなくそのほとんどがガストレアとこ交戦で会社から破壊されも最早生産されて

すらないからだ。

「そんなことより早く乗ってくれ防衛省に向かうの难道？」

「ハッ!!……そ、そうだったわね……早くいきましよう」

「そうだな」

二人は黎の声で気を取り直し車へと乗り込む。その時に黎は木更が乗る方のドアを開けて頭がぶつかからないようにドアの縁に手を当てていた。その動作はまるで流れるようにさも当然のように行っていた。木更が乗り込むと静かにドアを閉め運転席に回り、乗り込み静かに車を発進させた。

## 第五話

木更たちと合流し車を走らせ少したった頃、後部座席から声を掛けられた。

「ねえ黎さん：質問があるのですが：いいですか？」

「ん？：いいぞ、それと桜香後ろの二人にサンドイッチ渡してやれ」

「はくいでは木更さん蓮太郎さんどうぞ」

「ありがとうございます黎さん桜香ちゃん」

「ありがとう」

そう言つて木更たちが桜香から渡されたサンドイッチを食べ始めた。しばらくして二人が食べ終えそれを確認してから黎は木更に声をかけた。

「食べ終えてすぐで申し訳ないが社長俺に質問があると聞いてたが何だ？」

「あ…：そうでしたね…：こほん…：で質問ですが黎さんは何台車を持っているのですか？」

「えくと…：今、乗ってるの含めて四台だなあ」

「よ…：四台も…：」

「まあ後三台はまた今度な」

黎はそう言つて話を切り上げた。

その後蓮太郎が木更に声をかけた。

「そういえば延珠は呼ばなくて良かったのか？」

そういつた後蓮太郎は自分の前の席に座っている、黎のイニシエーターである桜香を横目でみる。

「ああ…：桜香ちゃんがいるから気になったのね？」

「ああ…：まあな」

「別に戦いになるわけじゃないの、むしろ眠くなるような話よ」  
「なるほど」

蓮太郎は合点がいった。前回の事件についてなにか聞かれるということか。しかしなぜいつもの報告書だけでは駄目なのだろうか。「私も詳しくわ聞かされてないわ、とにかく来い、だからね。役人は嫌

い。東京エリアを守ってる民警に、仕事をくれてやってるだけありがたいと思えとか真顔で言うもの」

「じゃあ今回の話、断れば良かったじゃねえか」

木更は蓮太郎の顔をちらつと見ると意味深に肩をすくめた。

「まさか。私たち見たいな弱小は、仕事を回さないと仄めかされれば従うしかないわ」

蓮太郎は溜め息をついた。

『民間』警備会社なのに、政府のひも付き、か…」

「嫉妬深いだよ。イニシエーターの能力に理論上の限界はないわ。最強クラスのイニシエーターは単独で世界の軍事バランスまで左右すると言われてるほど強いもの。だからあまねく政府は、すべての民警を自分の手元に置いておきたい、管理したがる」

今まで沈黙していた黎が木更たちの会話に口を挟んだ。

「社長…会話中に口を挟んで悪いがお前らはもう弱小というわけではないぞ。今回の召集に俺がボディガードとしてついていくことで注目が集まるだろう…それに…今しがた社長が言った最強クラスのイニシエーターは簡単に言うとは序列百位以内の民警ペアのことでもある。」

この意味をしつかり理解してくれ。因みに二人は俺たちの序列は知っていると思うがなww」

そう言っただけ黎は運転に意識を戻した。今の黎の発言に木更たちは自分たちが飛んでもない人物を迎え入れたと改めて感じたのだ。た。

それを元に蓮太郎は思ったことを口にした。

「虫のいい話だな。………ってことはこれから俺たちはある意味、敵地に取り込むわけじゃねえか」

木更と黎は小さく首を振った。

「やれやれいまさら気付いたの？だから私がボディガードに里見くんと黎さんを拾って来たのよ。頼りなんだからしつかりしてよ」

「黎さんとはもかく俺はいなくても良かったんじゃない？」

「なにいつてるの？確かに黎さんどっかの誰かよりすごくものすごく

く頼りになるけども……まだそこまで信頼できてる訳じゃないのよ……  
黎さんには悪いけど……」

「まあそうだよな。まだ入社して一日しかたつてないからなまるごと  
信頼なんか出来ないよな。だからこそのお前何だよ……蓮太郎」

二人の言葉が頭の中で何度も木霊してじんわりと感慨が沸いて  
くる。

その時、おもむろに肩に柔らかな重みがかかりドキリとする。蓮  
太郎の肩に首をもたせかけているのはほかでもない木更だった。彼  
女は重い目蓋を億劫そうに震わせている。

「ごめ……ちよつと眠い。肩、貸して。食後はいつもこれ。学校じゃ  
眠れないし……」

「眠れない？ どうしてまた？」

「私は……天童よ。みんなの鏡。無様な姿なんて、させない」

そこまでが限界だった。瞳を閉じた彼女の体から力が抜けると、  
ぐぐつと肩に重みがかかる。どうやら本当に寝てしまったらしい。

ブオオオオオ、と静かなエンジン音を響かせ車が走る。窓から差  
し込む光が陰影を変えて木更の表情を照らした。

蓮太郎は木更の寝姿に心奪われながらも綺麗だ、と素直にそう  
思った。

「里見……くん」

あやうく返事しそうになって、それが彼女の寝言であることに気  
づいた。だが次の瞬間苦しげに吐かれた言葉は、れの胸を深く抉っ  
た。

「里見く……私の復讐。手伝つ……天童を、殺す……の」  
「……………はい」

木更は眉を八の字にして体を丸めるとビクッビクッと震えはじ  
めた。

「おと……様、お母様……やだ、死なないで……ッ。里見く……助け  
てッ」

蓮太郎は木更の肩に腕を回すと、そのまま無言で強く抱きしめ  
た。

黎と桜香は後ろからの声を聞こえない降りをしながらか防衛省への道を急いだのだった。



## 第六話

昼下がりの庁舎は閑散としていた。

黎たちが入口で名前を告げると、庁舎の中に案内され、清潔感のあるエレベーターがぐつと上昇する。

第一会議室と書かれた部屋の前で、案内した職員は一礼して去っていった。

木更に代わって扉を開けると、蓮太郎は思わず声を上げる。小さな扉からは想像できないほど部屋は広く、中央には細長い楕円形の卓、奥には巨大なE.L.パネルが壁に埋め込まれていた。

問題は中にいる人間だった。

「木更さん、こいつは……」

「ウチだけが呼ばれたわけではないだろうと思っただけど、さすがにこんなに同業の人間が招かれているとは思わなかったわ」

仕立ての良いスーツに袖を通した、おそらく民警の社長格の人間たちはすでに指定の席に座っており、その後ろに、見るからに荒事専門という厳つい連中が控えていた。彼らの手にはブラツククロームの輝きを放つバラニウム合金の武器。間違いなく蓮太郎や黎と同じプロモーターだ。彼らの傍には延珠や桜香と同じくらいのイニシエーターも幾人か控えているのが見える。

一体、これからここでなにが始まるんだ？

蓮太郎が部屋に足を踏み入れた瞬間、中にいた人間たちの雑談がぴたりと止まり、蓮太郎の後に入室した黎と桜香を見ると中の全員が一瞬息をのみ驚愕した。

その驚愕の後に一人のプロモーターがこちらに近づいてきた。そして……

「最近の民警はどうなってるだよ。ガキまで民警ごっこかよ。部屋あ間違ってる湯じゃないのか？社会科見学なら黙って回れ右しろや」

燃え上がるように逆立った頭髪に、口元はドクロパターンのフェイススカーフで覆っている……伊熊将監がつかつかつてきた。その後少し口論になり蓮太郎に頭突きをしようと将監がモーションを起

こす前に黎が将監の胸ぐらを掴み床に叩きつけた。

バタアアアン!!

その音に部屋の人間たちは驚き席から立ち上がった。蓮太郎と木更は何が起きたかさっぱり分からずポケーっとしていたが状況が少しずつ呑み込めてきた。黎が将監からの乱暴な『挨拶』を止めてくれたのだった。

一方蓮太郎に頭突きをしようとした将監は自分がなぜ床に倒れているのか一瞬分からなかった。がしかし自分の目の前で自分よりも圧倒的な力の前に押し潰されそうになっていた。その存在に一瞬目を向け、意識を落とした。

黎は将監を床に叩きつけたときやってしまったと思っていた。がやってしまったことはしようがないと割りきり気分を切り替える。

他のプロモーターは今の一瞬のやり取りで黎の存在に驚くと共に自分達では到底敵わないとその肌で感じたのだった。彼の纏っているオーラはこの中の誰よりも圧倒的かつ静かであるからだ。

他のプロモーターや社長たちが唾然としているなか将監の所属している会社の社長が黎たちに近づき謝罪をしてきた。

「すまないね。あいつは短期でいけない」

「……しっかりと手綱握つとけよ。じゃないと……」

黎はそこまで言つてニヤリと口元をつり上げ席に向かう。三ヶ島はその顔を見て背筋に寒気が走り絶対に敵に回してはいけないと肌で感じたのだった。それから木更に向き直る。

「お綺麗な方だ。お初にお目にかかります」

「あら、お上手」

「ところでさっきの方は貴方の会社の方ですか？」

「ええ……でも最近入ったばかりですけど」

「……そうですか……彼は『あの』無久羅黎ですよね？」

『あの』？……よくわかりませんが……はい彼は無久羅黎その人です」

木更は三ヶ島の言った『あの』の意味が分からなかったが今は気にしてもしょうがないと小さく首を降つて気持ちを切り替えネーム

プレートがある末席へと向かっう。

「俺たち、末席だな」

「仕方ないわ。実績では、一番ウチが格下なんだから」

よく見るとこの場に招かれたのは、遣り手ですと言わんばかりの雰囲気を発散している大手ばかり。

その中で一席、個人の名で書かれている席がある。いうまでもない無久羅黎の名だ。彼は先の騒動の後すぐに自分の席があることを確認したためその席に座る。

木更と蓮太郎は、自分より上席の席にいる黎を見て改めて実感した。彼等は自分たちが何年かければ同じ舞台上に上げられるのか、ということ。

「それよりなんで弱小の俺たちがいるんだ？」

「さあね、これからわかるんじゃないの」

蓮太郎は対面に座っているさきほどの連中を見ながら小さく耳打ちする。

「ちなみに里見くん、君と延珠ちゃんのIP序列覚えてる？」

「よくは覚えてねえけど……十二万ちよいくらいだったか」

「私も端数は覚えてないわ、けどそのぐらいよ」

木更はチラリと蓮太郎の方を見ると、わざとらしく溜息をついて見せた。

「しかもあの会社、彼よりもまだ強いペアも抱えているのよ。私の事務所にもあれくらい強いプロモーターが欲しいものね。インシエーターはとて優秀なのに、ウチのプロモーターはお馬鹿で甲斐性なしで私より段位が低くて、おまけにどうしようもなく弱いよねえ」

「木更さんそれだと黎にも言ってることに……」

「ならないわよ!!このお馬鹿!!」

蓮太郎は木更の揚げ足を取ろうとしたが、その前に木更に否定され聞こえなかったフリをした。

その時、制服を着た禿頭の人間が部屋に入ってきた。

木更を含む社長クラスの人間が一斉に立ち上がりかけた所で、それを男が手を振って着席を促す。遠くて階級章が見えないが、おそら

く幕僚クラスの自衛官だ。

「本日集まってもらったのは他でももない、諸君等民警に依頼がある。依頼は政府からのものと思ってもらって構わない」

禿頭がなにかを含ませるように一拍置いて辺りを睨め付けた。

「ふむ、空席一、か」

その後すぐに話を再開した。

「本件の依頼内容を説明する前に、依頼を辞退する者はすみやかに席を立ち退席してもらいたい。依頼を聞いた場合、もう断ることはできないことを先に言っておく」

黎は早く本題に移れよ、と思いつながら席で目を瞑っていた。

誰一人として立ち上がる者はいなかった。

「よろしい、では辞退はなしということでしょうか？」

禿頭の男が念を押すように全員を見渡すと、「説明はこの方向に行ってもらおう」と言いつて身を引いた。

背後の奥の特大パネルに一人の少女が写し出された。

『ごきげんよう、みなさん』

次の瞬間勢いよく他の社長格の人間も立ち上がった。

そこに写された人物はそれほどの人物だった。

## 第七話

「……聖天子様」

聖天子はオールヌーヴォー調の精緻な細工の椅子にゆつたりと腰かけており、背後に高そうな絵画や天蓋付きのベッドが見える。聖居内にある彼女の私室だろう。

黎はあくびを噛み殺しながら耳を傾ける。

『楽にしてくださいみなさん、私から説明します』

誰一人として座する者はいなかった。

『といっても依頼事態はとてもシンプルです。民警のみなさんに依頼するのは、昨日東京エリアに侵入して感染者を一人出した感染源ガストレアの排除です。もう一つは、このガストレアに取り込まれていると思われるケースを無傷で回収してください』

「ーケース?まさか!」

パネルに別のウィンドウが開かれジュラルミンシルバーのケースのフォトがポップされ横には成功報酬が表示された。その値段を見て周囲の空気が困惑g混じり出す。黎は、この成功報酬を見て苦虫を噛み潰した顔になった。

三ヶ島が手を上げた。

「質問よろしいでしょうか。ケースはガストレアが取り込んでいる、もしくは巻き込まれていると見ていいわけですか?」

『その通りです』

「感染源の形態、種類、潜伏場所など政府は情報を掴んでいますか?」  
『残念ながらそれについては不明です』

木更が拳手する。

「回収するケースの中には何が入っているか聞いてもよろしいでしょうか?」

『おや、あなたは?』

「天童木更と申します」

『…お噂は聞いております。それにしても妙な質問をなさいますね天童社長。それは依頼人のプライバシーに当たるのでお答えできません』

ん』

「納得できません。感染源ガストレアが感染者と同じ遺伝型を持っているという常識に当てはめると感染源ガストレアもモデル・スパイダーでしょう。その程度ならウチのプロモーターでも倒せます」

「問題はなぜそんな破格の依頼料でしかも民警のトップクラスのヒトたちに依頼するのかが腑に落ちません。ならばそれに見会った危険がそのケースの中にあると邪推してしまうのは当然ではないでしょうか？」

『それは知る必要のないことでは？』

「かもしれません。しかし、そちらが手札を伏せたままにいるなら、ウチはこの件から手を引かせていただきます」

『……ここで席を立つと、ペナルティがありますよ』

「覚悟の上です。そんな不確かな説明でウチの社員を危険にさらすわけにはまいりませんから」

木更はそういつて席を立とうとして一端こちらに目を向けた。黎は目を閉じて小さく首を降り行動を制した。木更は不思議そうに首を少しかしげたが思い止まったようだ。

黎は部屋に侵入したヤツに向けて鋭い視線を向けながら口を開く。

「木更、今回は俺にしたがってくれないか？それに俺の勘があつている場合非常にヤバイことになる。そうだろ？影胤」

そういうとけたましい笑い声が響き渡った。会議室にいる全員が声の主に集まる。

先程まで空席だったところにシルクハット、赤い燕尾服の怪人が卓に両足を投げ出して座っていた。

両隣の社長たちは忽然と現れた仮面男に驚いて椅子から転げ落ちている。

蓮太郎は目を見開き驚き口から「お前は…そんな馬鹿なッ」と口走っていた。

影胤は卓の上に土足で上がり中央で立ち止まると聖天子と相対する。

『……名乗りなさい』

「これは失礼」

影胤はシルクハットを取り体を二つに折り畳んで礼をする。

「先程そちらの序列五十位様からご紹介いただきました。私は蛭子影胤という。お初にお目にかかる、無能な国家元首殿。端的に言うとは君たちの敵だ」

蓮太郎は腰から拳銃を抜き向けていた。

「お、おまえッ……」

影胤は蓮太郎に顔を向けた。

「フフフ、元気だったかい里見くん。我が新しき友よ」

「どっから入ってきやがった!」

「フフフ、その答えに対しては、正門から、堂々と―と答えるのが正しいだろうね。もつとも小うるさいハエみたいなのが突つかかってきたので何匹か殺させたけどね。おおそうだ、丁度良いタイミングなので私のイニシエーターを紹介しよう。小比奈、おいで」

「はい、パパ」

小比奈と呼ばれた少女は難儀して卓の上へのぼると影胤の横に来てスカートをつまんで辞儀をする。

「蛭子小比奈、十歳」

「私のイニシエーターにして娘だ。」

小比奈と名乗った少女は影胤の服の裾を引っ張りながら「斬ってもいい?」と言って影胤から制止され「うう…: パパア」と少しご機嫌ななめな様子だ。

すると蓮太郎が影胤に声をかけた。

「なんの用だ」

「今日は挨拶だよ。私もこのレースにエントリーすることを伝えておきたくてね」

「エントリー? なんのことだ」

『七星の遺産』は我らがいたかどうかと言っているんだ」

その単語を聞いた瞬間、聖天子が観念したように一瞬目をつぶった。

黎もその単語を聞いてやっぱりかと半ば諦めたように目をつぶっ

た。そして目を開きパネルの画面に写っている聖天子に鋭く殺気だった視線を送る。それから影胤に視線を向け様子を伺う。

数分のやり取りでこちらは負傷者が出ていた。なにが起きたかというと将監が影胤に切り込むとその剣が弾き飛ばされそれから黎と桜香以外の全員が自営用の拳銃で一斉射撃を浴びせたがドーム状のバリアにより弾き返された。それにより跳ね返った銃弾が負傷者を作ったのだ。

影胤が鷹揚に両手を広げる。

「斥力フィールドだ。私は『イマジナリー・ギミック』と読んでいる」

「……バリア、だと？ お前本当に人間なのか？」

「人間たとも。ただこれを発生させるために内臓のほとんどを抽出してバラニウムの機械にた詰め替えているがね」

「機械……？」

「名乗ろう里見くん、

私は元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊『新人類創造計画』蛭子影胤」

三ヶ島が驚きに目を見開く。

「……ガストレア戦争が生んだ対ガストレア用特殊部隊？ 実在するわけが……」

「信じる信じないは君の勝手だよ。まあなにかね里見くん？ つまり私のはあの時まったく本気じゃなかったのだよ。悪いね」

「君にプレゼントだ。ではこの辺でおいとまさせてもらうよ。絶望した前民警の諸君。滅亡の日は近い。行くよ小比奈」

「はい、パパ」

二人は窓まで歩いていくと窓を割り自然な動作で飛び降りた。

黎は木更たちに近づき声をかけようとして聖天子の声が響く。

『静粛にッ！』

『事態は尋常ならざる方向に向かっています。みなさん、私から新たにこの依頼の達成条件を付け加えさせていただきます。ケース奪取



を企むあの男より先に、ケースを回収してください。でなければ大変なことが起こります』

木更が聖天子を睨む。

「中に入っているものがどういうものなのか、説明していただけませんか？」

「木更…それには及ばないよ。俺が知っているからな」

「えっ…!?!」

「七星の遺産…あれはモノリスの結界を破壊し東京エリアに大絶滅を引き起こす封印指定物だ。あれはガストレアステージVを呼ぶ触媒となりうる」

「黎のその言葉に会議室にいた全員が息を飲んだのだった。」

## 第八話

聖天子からの依頼を受けてから数日……黎と桜香はとある場所に  
来ていた。

そこは外周区に程近いボロボロの一軒家。しかし、その一軒家は見  
た目と中身は違っている。ここは黎と桜香が使用する武器弾薬の他  
に車やヘリを保管するための家である。

なぜここに来たかと言うと、いつ蛭子影胤追撃作戦が開始されても  
いいよう今のうちに補充を済ませて置こうと来たのである。

プルルルル、プルルルル、プルルルル

すると突然携帯がなり始めた。携帯の液晶を覗くと天童木更の文  
字が写し出されていた。

電話の内容は感染源ガストレアの発見と今、蓮太郎と延珠が向かっ  
ていることが伝えられ、それから至急駆けつけてほしいとのことだっ  
た。黎はそれに同意し電話を切ると桜香にアイコンタクトを送りす  
ぐに補充を済ませ改造したカワサキのニンジャにタンデムで股がり  
颯爽と飛び出した。

バイクを走らせること数分……スマホのGPSで蓮太郎の位置  
を確認しながら木々の間を駆け抜けると蓮太郎が延珠の足元に一発、  
発砲したところだった。

延珠はその場から走り去ると小比奈が延珠を追いかけたがったが  
影胤に制止されていた。小比奈は蓮太郎をギロツと睨み付けると背  
後にまわり2本の刀身を腹に刺して何度もノコギリのように押した  
り引いたりしていた。

黎はデザートイーグルを桜香は虎の爪をそれぞれ構え蓮太郎の救  
出の機会を伺う。黎が小さい声で桜香に声をかけた

「桜香…蓮太郎と小比奈が離れたらすぐに飛び出すぞ……飛び出した

ら小比奈を頼む……俺は蓮太郎を救出する」

「わかりました……」

そういうと2人は臨戦態勢になる。

蓮太郎は血反吐を吐きながらも裏拳で小比奈を振り払うと同時に黎と桜香は駆け出した。桜香は小比奈へ黎は蓮太郎へとそれぞれ向かう。

黎は蓮太郎のそばに行き傷の具合を見る。傷はかなり深く大量に出血もして意識が朦朧としていた。早く病院につれていかなければと思うが敵がいては搬送ができない。そこで黎は桜香に指示を出す。

「桜香!!リミッターを一段階解除するぞ!!」

「ッ!!はい!!」

黎と桜香はズボンのポケットに手をつ込みあるモノを取り出す。それを口へと入れ噛み砕く。すると身体の中から沸々と何かが沸き起こってくる。その瞬間に黎と桜香は身を屈め飛び出した。一瞬にして影胤と小比奈の目の前に現れた黎と桜香はそれぞれの武器で攻撃を繰り出す。

影胤と小比奈は一瞬にの出来事に驚き反応が遅れその攻撃を諸に受け吹き飛ばされて行った。黎はすぐに蓮太郎の元へ走りより背負うと走り出す。桜香も黎の横に並走しながら周りの警戒をしながら走る。

バイクへと戻ると股がりに蓮太郎を乗せて走り出す。

「桜香お前は会社に戻って社長に連絡してくれ」

黎は横を走る桜香にそう言いうと頷き桜香が離れていく黎はそのままバイクを走らせ病院へと向かった。

## 第九話

バイクを走らせること数分、病院へと着くと蓮太郎は手術室へと運び込まれ緊急手術が始まった。

黎はベンチへと腰を下ろし木更と桜香の到着と手術が終わるのを待った。しばらくして桜香が木更と共に到着すると木更が声をかけてきた。

「黎さん!!里見くんは無事ですか!?!」

「今緊急手術が行われている……一応、病院に着く前に応急処置として止血をしたから出血はある程度抑えられたはずだが傷口が広いから何とも言えん……」

「そ、そうですね……」

木更は手術室の扉の前で点滅している手術中の文字を見ながら両手を合わせ目をつむり祈るように立ち尽くしていた。

-----

### 数時間後

手術中のライトが消え手術室の扉が開く。蓮太郎はストレッチャーに乗せられ数人の看護師と数本の管に繋がれた状態で病室へと連れて行かれた。執刀医も出てきて説明を受け蓮太郎の病室へと足を向けた。病室では蓮太郎が寝ていたが起きそうにないため黎と桜香はその場を後にした。

それから1日後、黎と桜香は蓮太郎の病室へと来ていた。が、先客

がいた。もちろん木更だ。木更は蓮太郎が寝ているベッドの横でリンゴの皮を剥いていた。

やがて蓮太郎が目覚ました。

「……よう、木更さん」

木更はぎゅつと目をつむって唇を噛みまっげをふるわせると、瞳に涙を滲ませながら懸命に微笑んだ。

「お帰りなさい、里見くん」

「無事だったかお前も悪運がいいみたいだな」

蓮太郎はその声に目を見開きながらも苦笑する

「まだ地獄みたいだな」

「ええ、そうよ」

蓮太郎はサイドテーブルを見た。

「……リンゴ、剥いていたんだな木更さん」

木更は袖で目元を拭った。

「食べる？」

「いや、なんにも食べてないはずなのに、あんまお腹すいてねえよ」

億劫がる体に命令して首を窓側に向けるとそこには椅子に腰掛けしている黎とその膝の上に座る桜香がいた。

黎は窓の外に顔を向けており、澄んだ夜空には鋭角な月が覗いていた。黎は蓮太郎の視線に気づき顔を向けた。

「それでも少しは腹に入れとけよ」

「………わかりました」

蓮太郎はベッドをリクライニングにすると木更からリンゴをもらい少しづつ口に含み咀嚼をする。病室にはリンゴを食べるシヤクシヤクとした咀嚼音がしばらく響く。

リンゴを食べ終えると蓮太郎は木更の方に振り返り訪ねる。

「俺は、どれくらい寝てた？」

「丸一日と三時間くらい。大手術だったわ。黎さんが応急処置したけど傷口が広がって最低限しか止血出来てなかったみたいで……。一度は医者もさじを投げかけたそうよ。でも、君の心臓、最後の最後にトクントクンって動き出した。生きることをあきらめなかったの、偉い

わ」

木更は人差し指でつつ、と蓮太郎の胸元をなぞると心臓の上で二回タツプした。蓮太郎は少しどきまぎする。すると近くから「うっうん」と咳払いの音がして二人はとっさに音のする方に振り向くと黎がバツの悪そうな顔で二人を見ていた。

「あ……邪魔なら出て行くが？」

黎がそう言うのと二人は顔を赤くしとっさに離れた。木更は顔をうつ向かせながらモジモジと内腿を擦り合わせ、蓮太郎は右手で頬をポリポリと掻きながら目は右往左往していた。